

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 啄木と中国—唐詩選をめぐって

doi:10.29714/TKJJ.199112.0007

淡江日本論叢, (1), 1991

作者/Author: 林丕雄

頁數/Page: 160-179

出版日期/Publication Date: 1991/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.199112.0007>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼 (Digital Object Identifier, DOI) 的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



啄木と中国

—唐詩選をめぐる—

林 丕 雄

(一)

比較研究は両者の影響関係が立証できるものに限るのであるが、啄木が中国の唐の詩人の影響を受けている比較論を展開した論文や著作は極めて少ない。本文は啄木と唐詩の関係を究明し両者の相似性を論じてみたいと思う。

啄木は明治四十一年十月十三、十四、十六日の岩手日報に「空中書」なる一文を献じた。その中に

「帝国は未だ嘗て清露両国に勝たざるなり。敗れたるものは、清国に非ずして北京政府と其軍隊のみ……」。

「人よく今の日本を以て古希臘に比す。……然らば乃ち、古羅馬の大業は之を支那の将来に待たむ乎。世界第二十一世紀の劈頭に大呼するもの、夫れ李杜二聖を出せるの民乎」。

とその戦後の感想を述べている。日清・日露の戦争が終って日本政府や国民が戦勝気分酔っていた時に放った警鐘で、其大意は日本帝国が勝ったのは北京政府と清の軍隊のみであり清国を完全に征服したのではない。二十一世紀の将来には中国が古羅馬の大業を為すであろう。なぜならばそれは李白、杜甫二大詩人を生んだ文化大国であるからだとして李杜に対する敬意を述べている。李白、杜甫の詩を読んでそれを完全に咀嚼しなければ斯る大言壮語はできないのである。啄木が中国文化に触れた後の所感を述べたものとして大いに注目しなければならないと思う。啄木は清の政府と軍隊の腐敗を認めても古代から伝わった中国の文化を否定しなかったばかりでなく、中国の文化は日本の武力に勝ることを暗示し、日本の武力は中国の文化を制圧することはできないことを明示している。中国文化の中で就中啄木は李白と杜甫の二大詩人を尊敬して止まなかった。ここで啄木と唐詩の関係について論及する必要があるかと思われる。

明治三十七年（一九〇四年）啄木の父一禎が宗費滞納のゆえをもって本山より罷免の処分を受け、その翌年啄木が堀合節子と結婚して六月四日盛岡市帷子小路八番戸に

新居を定めてから執筆された「我が四畳半」(三)に

「……さりとして新らしい本を切々買ひ込むなど、云ふ余裕のある読書家にあらず。この机の上を見ても知らるべし、物茂^{なつも}脚の跋ある唐詩選と襤褸になりたる三体詩一卷、これ何れも百年以上の長寿を保ちたる前世紀の遺物なり……これは我が財産中、おのれの詩稿と共に可成盗まれたくなしと思ふ者なり」。

という一文があるが、これより見ても啄木は結婚以前に唐詩に親しみ、古い唐詩選を非常に大切にしていたことがわかる。又、明治三十七年八月末北海道を初旅行して津軽海峡を渡った時

「上甲板の欄干に凭りて秋天一碧のあなた、遠く日本海の西の波に沈まむとする落日を眺めつゝ、悵然たる愁懐を蓬々一陣の天風に吹かせ、飄々^{なんのにたるところぞ}何所似、天地一沙鷗と杜甫が句を誦し且つ誦したる時……」。

という感懐を述べている。彼が明治三十七年八月以前に杜甫の詩を読み、飄飄と海を渡る一沙鷗のような杜甫の生活に共鳴を感じていたことがよくわかるであろう。

この杜甫の句というのは「旅夜書懐」（旅夜、懐を書す）という杜詩の第二首中の二句である。この詩は杜甫が五十四歳の年、代宗の永泰元年（七六五年）の秋、蜀における杜甫の後援者嚴武が死し、杜甫のかりそめの安息所であった成都の浣花草堂にも安住できるような状態ではなくなった為、家族をひき連れて小舟に乗り成都から渝州（今の重慶）まで揚子江を下る秋の月夜に舟中で作った詩である。第二首のみを抄録すると

二 名豈文章著 名は豈文章もて著わさんや
官因老病休 官は老病に因^よって休む
飄飄何所似 飄飄として何の似たる所ぞ
天地一沙鷗 天地の一^{きおう}沙鷗

とあり、「文章や文学によって不朽の名声を博そうなどという気持はなく、今や老衰と病弱とのために、官吏への執念をも断ち切らねばならない。風にひるがえる木の葉のように、流浪の旅に出たわたしのようにみじめな者がほかにもあるだろうか。あると言えば天地の間を所定めず飛び廻っては時おり沙浜に憩うあの一羽のかもめこそが、わたしの仲間なのだろう」という意味である。

杜甫は自らを「天地の一沙鷗」とし、この句を案じ得たことに詩人としての喜びを感じると同時に漂泊に次ぐ漂泊の生涯をふり返って、わが身の不運を嘆いたのであるが、啄木は初渡道の際、中学を中退して明治時代のエリートの仲間入りができなかつ

た自分の運命を嘆き、津軽の海を渡る自分を、揚子江を下る杜甫になぞらえて共鳴を感じたのである。これによって啄木はこの時から唐詩選に親しみ、特に杜甫の詩を好んだということがわかる。

北海道に遊んで帰郷した時、二度目の津軽海峡は波高く風がすさんだ。啄木は「飄々たる天地の一沙鷗かくて双翼^も思ひを孕んで一路北に飛び、広瀬河畔に吟行する十日……かくて、嵐の海をたゞよひ来し破船^{やぶね}の見覚えある岸の陸に入るが如く、我見^{かい}の權を折り、栄光の帆を下して、何はともあれ、心のほほゑみ秘めもあへず、静かにこの四疊半に入りて閑天地を求め得ぬ」。

などと書いている。天地の一沙鷗が理想を抱いて渡道をしたけれども人生の夢が破れた悲しみを述べている。この時も杜甫の詩句を応用し、自分を杜甫と同じように天地の一沙鷗と言っている所から見ると啄木は杜甫の漂泊の詩人としての生活に共鳴し、深くその影響を受けていることがわかる。

註

1. 啄木全集 第四卷 筑摩書房 68頁
2. 「我が四疊半(六)」 同前掲 71頁
3. 「我が四疊半(七)」 同前掲 73頁

(二)

函館を皮切りに北海道の漂泊を終えて東京へ出た啄木は自分の書いた小説「二筋の血」「天鵝絨」を長谷川天溪にどこかに売り込むように頼んだが明治四十一年八月三日長谷川から返事が来た。

「夜長谷川氏より、予の“二筋の血”及び“天鵝絨”と共に来書。遂に文芸倶楽部に載するあたはず、太陽も年内に余地を作ること難き故、お気の毒乍ら他に交渉してくれと」。

要するに小説の原稿がどこにも売れず、いらいらしていたその翌日、

「半日金田一君と語る。例の稚き頃の思出。話してる所へ、与謝野氏より書留、為替五円。……夕刻為替をうけとり、原稿紙と蚊やり香と煙草と絵ハガキ数枚と、外に、蕪村の句集、唐詩選、義太夫本、端唄本二冊もとめて来る」。

と記載している。彼が東京へ出て失意のどん底にあった時、鉄幹から五円の為替が届いて真先に買ったのが蕪村句集と唐詩選であった。

これから見るに啄木は新旧二部以上の唐詩選を所有していたことがわかる。啄木が五円の中から買い求めた唐詩選はどこかの出版によるものかさだかではないが、盛岡の四畳半で生活していた時に残した古い唐詩選とは異った本であることに間違いはあるまい。啄木にすればもっと早くこの本を手に入れたかったのだろうが金銭的にゆとりがなかったためか、鉄幹から五円送られてきた当日すぐに欲しがっていた唐詩選を買ったのだろう。或は小説の原稿が売れないので小説家の夢破れもっと詩に力を入れてみようとしたのであろうか。その理由として唐詩選と一緒に購入したのが蕪村の句集であり詩と関係のある本が多い。蕪村句集と唐詩選を買い、先に蕪村句集から読み始めた。その翌日の八月五日、蕪村句集を読んだ後の感動を次のように日記に書いている。

「床につきて蕪村句集を読む。唯々驚くに堪へたり。四時の時計をきいて初めて巻を捨て燈を消せり」。

蕪村句集を読んでから唐詩選を読んだようで、新しい唐詩選を買ってから約一ヶ月半経過した九月二十六日唐詩選の中の白樂天について次のように述べている。

「白樂天詩集をよむ。白氏は蓋し外邦の文人にして最も早く且つ深く邦人に親炙したるの人。長恨歌、琵琶行、を初め、意に会するものを抜いて私帖に写す。詩風の雄高李杜に及ばざる遠しと雖ども、亦才人なるかな」。(旁点筆者)

「一握の砂」の中に流離の感傷をうたった作品がある。その中の

浪淘沙

ながくも声をふるはせて

うたふがごとき旅なりしかな

はその代表的な秀歌である。「浪淘沙」は白樂天の「浪淘沙詞」の模倣であることに間違いはない。白樂天は別離している男女の情をテーマとし、啄木は特にこれを愛唱した。それは吉田孤羊「啄木写真帖」に白樂天の「浪淘沙詞」筆写の写真が掲載されていることから明らかである。⑥白詩は六首からなりロマンチックな情趣を含み啄木は「唐詩選」の白詩を読んで共鳴をよびおこしたのであろう。それは九月二十六日に続いて翌二十七日の日記にも

「白詩に親む。共に琵琶行を吟じて花明君⑥の眼底涙あるを見、撫然として我の既に泣くこと能はざるを悲む。暮天秋雲迴。惆悵故園心。幼時母に強請して字を書かしめたることを思出でて、客思泣かむと欲す。涙流れず、一身為輕舟。悲秋常無錢。自称不孝兒。苦思強苦笑。」

と白詩を吟じた後の感動を記載しているところからはっきりすることである。注意すべきことは感動を述べた後啄木自作の漢詩を四句並べていることである。それだけ白詩の影響が啄木の生活や創作活動にも及んでいたことがわかる。その意味において啄木が筆写した白楽天の「浪淘沙詞」の部分を抄録し論憑の証しとしたい。

浪淘沙詞六首 節三

白浪茫茫與海連。 平沙浩浩四無邊。
暮去朝來淘不住。 遂令東海變桑田。

青草湖中萬里程。 黃梅雨裏一人行。
愁見灘頭夜泊處。 風翻閣浪打船聲。

借問江湖與海水。 何以君情與妾心。
相恨不如潮有信。 相思始覺海非深。

九月二十六日の啄木日記に“意に会するものを抜いて私帖に写す”と記しているから私帖に写した白詩の中に「浪淘沙詞」三首が含まれていたのであろう。白楽天「浪淘沙詞」三首を写したのは本郷森川町時代^⑥（明治四十一年九月六日から明治四十二年六月十六日）とされている。啄木が白詩の「浪淘沙詞」の影響を受けて「浪淘沙」の歌をつくったのは十月二十三日であった。原作は

浪淘沙長くもこゑをふるはせて
うたふが如くさすらひて来ぬ

であるが、歌集収録のさいに前掲三行詩に書き改められたものである。

ここで注意すべきことは啄木の九月二十六日の日記の最後の部分である。それは

「詩風の雄高李杜に及ばざる遠しと雖ども、亦才人なるかな」。

と白楽天と李杜の比較に論及していることである。(→)でも述べたように啄木は初渡道をする前から杜甫の詩を読み、津軽海峡を渡る時自分を漂泊の杜甫になぞらえて“飄飄何所似、天地一沙鷗”と口ずさんだことを日記に書いているところから見ると、啄木は杜甫の漂泊の詩を好み、それを白楽天の詩と比べたものと思われる。比較ができるということは両者の詩や詩風に精通していることを意味している。「詩風の雄高李

杜に及ばざる遠し」というのは白楽天のロマンチズムより李杜の漂泊の詩風を讃嘆したのであろう。「天地一沙鷗」のような生活を強いられていた啄木にとっては「浪淘沙」のロマンチズムは「食うべき詩」ではなかったのである。「石をもて追われるごとく」ふるさとを離れた啄木にとっては生活そのものがたたかいであり、食を求めて北へ北へと漂泊した啄木は新しく興った自然主義運動の声を聞き、文学的生命を賭けて東京へ舞い込んで行った。上京以来小説を書いて必死に奔走したにもかかわらず発表の望みはない。作品が世に認められず、したがって生活の方法がないとさとした啄木は「後には嘲笑^{うしろあざけり}の声を残し、友人には重い迷惑をかけ、親や妻子を寄食^{みきうらふ}の境涯に落し、恚うして出ては見たものの、此先どうなる事か？……又候^{またぞろ}東京を逃げ出す時が有りさう」^⑨に思えたので漂泊が再び現実となるのではないかという怖ろしさを実感していた。東京の生活に失望した啄木は自己を否定し、自己の価値、文学の価値を疑うようになった。啄木は絶望し下宿代さえも払えないほど生活が不自由になった。この時彼の脳裡にひらめいたのは「一切の不自由の中に居て真の自由を絶呼した杜翁^⑩の一老躯の方が貴い」とトルストイ論に言及したが、杜甫も不自由な官職を辞して天地一沙鷗のように自由に漂える身の喜びを謳歌し、啄木はこの杜甫の漂泊の自由を絶讃したのである。こういう状態の中で九月二十九日啄木は再び杜甫の詩を読んでその時の感動を次のように日記に書いている。

「杜甫を少し読む。字々皆躍ってる様で言々皆深い味がある。無論楽天などと同日に論ずべきものではない。これに比べると、白は第三流だ」。^⑪

啄木が唐詩に接触して色々とその感動を日記に記しているが最終的に到達した結論は「白楽天より杜甫が感動的であり、それに比べると白楽天は第三流」だと言うのである。勿論こういう評価は啄木個人の好みによるものであり、一般日本人は杜甫より白楽天の詩を好み、日本に紹介されている唐詩も白楽天の方が多いようである。杜甫の詩に影響された文人の名は漱石、芭蕉などの名が挙げられるが、白楽天の影響はもっと広く且つ庶民にまで及んでいるところから見ると啄木が最も杜甫に惚れたのは杜甫に対して深い共鳴を見いだしたからに他ならぬと考えるべきである。では、いったい、啄木は杜甫のどこに共感を抱いたのであろうか。芭蕉はみちのくの旅愁と自然を俳諧に託して杜甫の漂泊の詩を吸収したが、啄木はいかにして豊かな詩情をもつ杜甫の詩に接近したのだろうか。芭蕉の「奥の細道」も漂泊の詩歌（その漂泊の目的は違うが）に外ならず、啄木もそれと同じように杜詩の漂泊の詩情に共鳴してそれに感動し最高の唐詩と見做したのであろう。啄木が共感したのは「飄飄何所似、天地一沙鷗」であ

り、己れの小説の原稿が生活の糧にならなかったので「再びどこかへ漂浪に出るのではないか」という恐怖感を抱いていたさなか「一切の不自由の中に居て真の自由を絶呼した杜翁の一老軀の方が貴い」というトルストイの自由論に似た杜甫の佗びの美学に傾倒していったのであろう。真の自由を絶呼する啄木の目に杜甫がどんな詩人として映じていたかを示している。唐の極端な封建制度の不自由な時代に生きて自由に朝廷の腐敗を諷刺し、社会現実の醜悪を暴露した自由詩人^⑥である杜甫の姿が啄木の心弦に響いたのではなかったか。謂わば杜甫は政治の目的を遂げるため自由詩人として漂浪したのであり、漂浪が杜甫の手段であればこそ貧困も漂泊から生じたものであった。都会の生活に疲れ果て、毎日の生活に苦しんで貧窮と孤独のどん底に喘いでいた啄木は詩人としての杜甫を思い起こし、杜甫の漂泊の詩によって慰められ、励まされ、己れの漂泊の悲しみに堪えようとしたのではなからうか。

啄木が杜甫の詩に共鳴を感じたもう一つの理由として挙げられるのは杜甫の反骨精神であろう。啄木の反骨精神は盛岡中学時代のストライキ具申書起草事件及び其後の盛岡中学退学事件、代用教員時代のストライキ事件、小樽時代等次から次へと革命事件を連発させ、みちのく人としての反骨精神を燃やしつつ破滅への道を歩んで行ったことは今更述べるまでもない。

杜甫は開元二十三（七三五）年郷貢進士としての礼部試験を受けて落第してから十二年後の天宝六載（七四七）、再度試験を受けた。この試験は玄宗の詔勅によって行われたもので文に秀でる者を都に招いて受験させたのであった。杜甫の文才はこの時から朝廷に認められていたが、今回の試験も一人の合格者もないという奇妙な結果になってしまった。杜甫は宰相の李林甫が故意に全部を落第させ杜甫を眼の仇にしたことを知り官僚というものを本能的に不倶載天の敵として反骨を燃やした。杜甫の仕官の夢は破れたれども直接朝廷に文章を献じて出仕のいとぐちをつかもうと思って「三大礼賦」を作って献じた。玄宗はその文才を認めて任官させようと思ったがこれも李林甫に阻げられた。妻子をかかえての貧困から浮かび上がる術もなく詩を遊びの具としてではなく、生きるための手段として詩を作り出し^⑦、次第に官界への反骨が強くなって政治の腐敗墮落をあばくようになった。杜甫の漂泊は仕官の夢破れた揚句の果て、反骨魂に火花を散らせて一家離散の結果となった。彼の漂泊も啄木と同じように反骨の産物であり、貧窮の生活経験から啄木は杜甫の生き方に傾倒して行ったのである。

杜甫は天宝十四年（七五五）河西県（現在の雲南省昆明付近）の尉に任ぜられてやっと仕官の夢を果たすことができるようになったが意に満たなかったのですぐそれを辞

して受けず、その後間もなく右衛率府の青曹參軍に任ぜられた。この吉報を早く奉先県にいる妻に知らせるため十一月初旬長安を出発した。この時途中で見聞した苦難や危険、不安憂愁などを賦した長編詩「自京赴奉先縣詠懷五百字」には朝廷を諷刺する大胆な描写がある。

獨恥事干謁 独り干謁を事とするを恥ず
兀兀遂至今 兀兀として遂に今に至る
忍為塵埃沒 塵埃の為めに没せらるるに忍びんや
終愧巢與田 終に巢と由とに愧ずるも
未能易其節 未まだ其の節を易うる能わず
沈飲聊自遣 沈飲して聊か自ずから遣り
放歌頗愁絶 放歌 頗る愁絶なり

「おしつけがましい就職運動を続けてきたが、塵埃にまみれた忍苦の生活はけっきょく古典の隱遁者に恥ずかしくとも節操をまげる気にはならず、酒を飲んでうさばらしをしているのみで気ままな歌はなかなか悲痛の極みである」という意味で、ここに杜甫の節をまげない反骨がある。やっと官職が得られて杜甫の仕官目的が達せられた時にも杜甫は当時の政治と社会の腐敗を敢えて批判し、役人の喜ばない汚点を暴いて憚らなかつた。

「春望」「哀江頭」「北征」や「三吏三別」等にみられるように杜甫は封建時代の権勢にも負けず已れのみで見た社会の病態を詩に綴りながら仕官の途へと進んでいたが、杜甫は飢饉のため離散した人民に会い、荒れ果てた田地を見て官軍の無力を歎き、食事も喉を通らないほど心を痛めた⁹。杜甫は地方官吏として租税、兵役等の職務を全うせねばならず、民間の苦難をよく目で見ている立場から正義感と反骨魂が彼を官職に落着かせることができず決然と官職を辞した。杜甫は政治に対する絶望を辞職という行動で示したのである。彼の理想が夢と消えたので遂に官服を脱いで自由の身となった。

啄木が「一切の不自由の中に居て真の自由を絶呼した杜翁の一老軀の方が貴い」とトルストイの自由論に共鳴し、それと同じ思想を抱いていた杜甫にも共感したのは、杜甫が官職を辞して自由の身となったことを指して言うのであろう。啄木が波民小学校のストライキ事件によって教職を辞し、「石をもて追はるるごとく」ふるさとを後

にした経験の所持者であればこそ、その共鳴は大きい。杜甫は陶淵明のように平和な田園が彼を待っているわけではなく、妻子を連れて長く苦しい漂泊の生活が続くのである。啄木が教職を辞して北海道の漂泊に出た時の感懐も杜甫のそれに類似している。

啄木は真の自由を求めて天地の一沙鷗になった杜甫の生活にあこがれ（貧困から出た結果ではあったが）、杜甫の詩情に共鳴を感じて已れも天地の一沙鷗になろうと思って詩作に情熱を傾けた。天才詩人石川啄木はこんな生活環境から生まれたのである。その証しとして啄木文学は日本近代文学史上「一握の砂」を中心とした短歌に限定されていることから推察されるし、これらの短歌は殆んど明治四十一年以後の作が多い。「一握の砂」は啄木の漂泊の悲しみと人生の哀歎を詠んだものばかりで、その豊かな詩情は杜甫の漂泊の詩とその相似性を有しているのである。この点から見て啄木は杜甫の漂泊の詩情から深い影響を受け、それを模倣して「一握の砂」の構想を練ったことがわかる。三行詩及び詩のリズムは啄木自己の天才的創作によるもので、作詩のテクニクについて杜甫から学んだものはなく、これに関する文献の記載は全く見当らない。

明治四十一年は啄木が唐詩の影響を最も多く受容した年であり、彼の「一握の砂」の構想も中国文化に対する理解も最も稔りある年であった。その証しとして「空中書」は同年十月十三、十四、十六日岩手日報に発表されたものであり、九月二十九日の日記に杜詩の感動と結論を記した後の所産である。あれだけ偉大な思想と世界観が生まれたことは李・杜、特に杜甫に対して心酔した結果であるということがわかる。杜詩が啄木文学に与えた影響は甚且つ大であるといわねばならない。

「漂泊の愁ひを叙して成らざりし／草稿の字の／読みがたさかな」にあるように「漂泊の愁ひ」を小説に書いて中絶した作品に「漂泊」「札幌」「北海の三都」などがあるが、いずれも失敗に帰したためこの歌が明治四十三年十一月に作詩された。漂泊の悲しみを訴える「新しきインクのにほひ／栓抜けば／餓ゑたる腹に泌むがかなしも」（作詩明 43.10.13）、「わがあとを追ひ来て／知れる人もなき／辺土に住みし母と妻かな」（作詩明 43.11）、「こほりたるインクの罎を／火に翳し／涙ながれぬともしびの下」（作詩明 43.11）、「あはれかの国のはてにて／酒のみき／かなしみの滓を嚼るごとくに」（歌集初出）などの短歌はいずれも明治四十一年九月二十九日杜詩を最高の唐詩と絶賛した後に作詩されたもので「一握の砂」の最重要な部分を占める望郷詩群なども明治四十三年の作詩である。啄木の望郷詩が優れているという理由も漂泊によって帰るふるさとを失った失樂園の悲しみを詠んでいるからであり、漂泊の

悲しみによって生まれた望郷詩と言えるのではないか。以上述べたように「一握の砂」の殆どどの作詩が杜詩を読んだ後の所産であることから判断すれば杜甫の影響がいかに大きいか分かる。或は偶然に明治四十一年以降に作られたとしても、「一握の砂」の短歌が杜甫の漂泊の詩を読んだ後に書かれ両者に相似性がある故、杜甫の影響による賜物と言っても過言ではあるまい。

註

1. 啄木全集 五卷 明治 41. 8. 3日記 315頁 筑摩書房
2. 啄木全集 五卷 明治 41. 8. 4日記 316頁 筑摩書房
3. 吉田孤羊「啄木写真帖」 201頁 昭和 48. 9. 10 画文堂
4. 花明君とは金田一京助のことである。
5. 3. に同じ
6. 啄木全集第四卷「一握の砂」 155頁 筑摩書房
7. 啄木全集第四卷「林中書」 103、104頁 筑摩書房、杜翁はトルストイを指す。
8. 啄木全集第五卷 340頁 筑摩書房
9. 許慎知著「李白杜甫白居易」 85頁 大夏出版 民 79. 1
10. 和田利男著「杜甫」 52頁 めるくまー社 昭和 56. 8. 30
11. 対食不能餐 食に対して餐する能わず
我心殊未諧 我が心殊に未だ諧わず
(夏日歎)

(三)

啄木と杜甫の相似性を挙げると先ず二人とも漂泊をしながらそれを詩に詠んだと言うことが挙げられる。

啄木の漂泊は明治四十年五月五日函館に渡った日から始まり、札幌・小樽・釧路を経て明治四十一年四月二十四日上京するまでの一年間とされているが東京時代の晩年には朝日新聞社の校正係りとしてこの世を去るまでの約三年間社員として暮したものの、上京してから明治四十二年三月一日東京朝日新聞社に入社するまでは定職もなく収入もなかった。朝日新聞といっても校正係だから一家の生計を維持できる程のものではなかった。ふるさとを離れて東京でさすらいような生活も漂泊と見てよいと思う。漂泊の最中啄木は函館商工会議所の臨時雇、弥生小学校代用教員、小樽日報社、釧路新聞等の田舎記者だった。後の東京朝日新聞でも校正係の地位しか与えられなかったのは正規の学歴がなかったためであり、いくら自分の才能を信じていた啄木でもどう

することもできず、彼の漂泊はこんな運命から脱出するための手段だったのである。しかし下積みの人間の運命から脱出することは北海道でも難かしく、一年で東京へ出たのも一挙に自分の苛酷な運命から逃れるチャンスを自らつかもうとしたいがためであった。しかしそれも失敗に終わった。

杜甫の漂泊は四十四歳（七五五年）から五十九歳（七七〇年）の生涯を終えるまで続いた。彼は二十四歳の年に進士の試験に応じたが失敗し、三十六歳の時にも再び試験に失敗した。奸智に長じた宰相李林甫の謀略であったらしい説はほぼ定着しているが、その後も獵官運動を続けたにも拘わらず、反骨精神の強い彼は意に満たない官職を辞して受けなかった。

四十四歳から仕官生活に入り右衛卒府の^{ゆうゑそつぼ}曹參軍^{ちやうそうさんぐん}という下級官吏に任ぜられたが生活をする必要上仕方なしに職を受諾した。杜甫は奉先県に疎開させておいた妻子の見舞いを兼ねて仕官の報告に赴いた。丁度安祿山が反乱を起した年であり十二月には洛陽をおとし入れた。翌年家族をひきいて白水県の母方の家に移り、間もなく^{ふしゅう}酈州^{りしゅう}の^{きやう}羌村^{きやう}に転じた。杜甫は単身芦子関を出て肅宗の行在所に走ろうと思ったが途中で賊軍に捕えられ、長安に幽閉させられた。これが杜甫漂泊の始まりである。一時逃れて肅宗の行在所へ帰ったが間もなく肅宗の命によって官職を解かれた。安祿山がその子慶緒に殺されて官軍は長安・洛陽を奪還し杜甫も長安に帰り官職が戻された。四十七歳の年（七五八）杜甫は再び司功参軍に降格されて中央を逐われ翌年決然として官位を捨て、秦州に漂浪した。貧困の生活を余儀なくされて家族同行で蜀の錦城（成都）に行き露命をつなぐような生活を強いられた。それにも拘わらず安祿山の乱から逃亡漂泊を続けていた時分に道中の見聞や社会現象を長詩に綴った。「哀江頭」「北征」などは杜詩の傑作であり、貧乏生活が杜甫の作詩活動を刺激し、その活動は驚異と言わざるを得ない。彼の漂泊は政治のためでありながら政治の理想と現実のくいちがいを実感し、理想に走ろうと思って夢にまで見た仕官生活を捨て作詩活動に専念した点は啄木の作歌活動と趣を異にする。啄木は自然主義文学に刺激されて始めた創作生活の失敗がもとで作歌生活に入ったが、杜甫は仕官生活の失敗が原因であった。

漂泊生活中杜甫は成都の浣花草堂で安定した生活を得、高適、嚴武等のよき友に巡り合えたことは杜甫にとって最も幸せな時代であり啄木の函館時代によく似ている。啄木は函館時代に宮崎郁雨という良き友を得て漂泊生活中の援助を受けたが、杜甫は嚴武という旧友に支えられながら作詩生活を続けた。杜甫四十九、五十歳の二年間のことである。

五十一歳（七六二年）に嚴武が肅宗の大葬委員長として長安に帰ることになったので杜甫は舟で綿州まで送ったが時折徐知道の反乱によって杜甫は草堂に帰れなくなり綿州から梓州、閬州などにさすらった。

安定した生活が続かないのは漂泊の詩人によくあるパターンである。啄木は函館の大火で安定した生活を逐われて北海にさすらい、杜甫は嚴武を送って反乱の大混乱で交通が杜絶して帰ることができなくて一家が離散した。

七六四年杜甫が五十三歳の時朝廷より京兆功曹參軍の官職が与えられたが、杜甫は中央政界の実態に絶望しこれを拒絶した。丁度この年の二月嚴武が再び成都に赴任してきたので彼の推薦によって檢校工部員外郎に推され漂泊先で官職を得たけれども、嚴武と杜甫は長官と僚属という関係にあったがため人間関係に亀裂が生じ杜甫は草堂生活が恋しく、在任七ヶ月のみで決然と官を辞して浣花溪畔の草堂に帰ってしまった。勿論官を辞した原因は健康にも問題があったようであるが、主として仕官生活がいやになったことが主な原因である。

啄木も杜甫も才能のある詩人であり、自己の才能を過信して人間関係の圓滑さに事欠くことが多いのは両者に共通した反骨精神の血が流れているからであろう。これは次の章で述べるが二人とも社会派詩人として正義感にあおられ、社会の不条理性を詩に綴る詩聖の詩聖たるゆえんであろう。啄木の小樽時代がそうであり杜甫の成都仕官時代がそうであった。

七六五年四月嚴武が急逝したため、杜甫は又もや成都から離れることを考え、妻子を引き連れて草堂を去り揚子江を東へ下った。

杜甫が草堂を建てたのが四十九歳で、そこを離れたのが五十四歳の晩春であるから成都浣花草堂時代は五年余になるが、綿州、梓州、閬州などを一年余り転々と放浪したから、草堂で生活した実際の年月は四年にも満たない。この時代の詩作に五言・七言の絶句を多用して杜詩の特色を作り出したことは注目されるべきである。北海道漂泊時代の啄木にとって北海道が啄木文学の良き風土となったことなど、漂泊中の波瀾に富んだ生活が作詩のモチーフになって漂泊文学を形成し、啄木文学や杜甫文学の一聖地たらしめていることは日本、中国文学史上実に意義深いことである。

草堂を出た杜甫は雲安から夔州に移り住み都督伯茂林の生活援助を受けた。夔州時代果園菜園をいとなみながら異郷の風俗に興味を感じ、恵まれない僻地の生活に同情している。

夔州處女髮半華 夔州の処女髮半ば華く

四五十無夫家 四五十にして夫家無し
更遭喪亂嫁不售 更に喪亂に遭いて嫁售れず
一生抱恨長咨嗟 一生涯を抱いて長へに咨嗟す。

と未婚のまま老い行く女が多いことを嘆いている。

洞庭湖の東岸に到着したときはもう五十七歳の年の瀬も迫ろうとしていた頃だった。古今の絶唱と称せられる「登岳陽樓」は湖畔の岳陽樓から洞庭湖の壯観を詠じた五言律詩である。杜甫は湖畔一帶の農民や漁民の窮迫した生活ぶりを見聞し、義憤して「歳宴行」を作った。杜甫晩年の傑作と推称されているこの詩は洞庭湖の歳末のきびしい冬景色と漁獵に従事する民衆の窮状を記している。愛児を売ってまで租税を納入しなければならぬ窮民の悲劇を

況聞處處鬻男女 況んや聞く処処男女を鬻ぎ^{ひき}
割慈忍愛還租庸 慈を割き愛を忍んで租庸を還す

と詠んでいる。啄木の三行詩にも

百姓の多くは酒をやめしという。

もっと困らば、

何をやめるらむ。

とある点は両者の民衆に対する同情、時局に対する悲憤がこめられており、啄木・杜甫二者は貧窮に喘いでいても純粹で美しい魂の火を燃やし続けてきた。両詩聖には共通した放浪の美学が血の中を流れているといえよう。啄木が杜甫の詩を読んで共感を覚えたのは極く当然のことと言わねばならない。

洞庭湖に入って約一年数ヶ月の間、杜甫とその家族は湖南の地を浮草のように漂流した。杜甫は舟を家とし、薬草を採っては売りに出かける。ような惨怛たる生活を強いられた。

潭州に着いた年には病身の杜甫も再起不能になっていた。己れの漂泊の苦を詠んだ

此身漂泊苦西東 此の身漂泊して西東に苦しむ
右臂偏枯半耳聾 右臂は偏枯し半耳は聾す
寂寂繫舟雙下淚 寂寂舟を繋ぎて双びに涙を下し
悠悠伏枕左書空 悠悠枕に伏して左もて空に書す。

は啄木が釧路での漂泊生活の苦を詠んだ

凍りたるインクの罫を

火に翳し

涙ながれぬともしびの下
の感懐を一にしたものである。

啄木も杜甫も漂泊の悲しみを詩に詠んだ。啄木の「一握の砂」詩集にある三行詩は東京に出てからの回想詩であるが杜甫は漂泊中の作である。啄木はこれらを三行詩という新詩体で発表し、杜甫は唐詩の七言律詩を定着させた。

註

1. 杜詩「負薪行」
2. 福原龍蔵著「杜甫」 35頁 昭和62.1.9 第十五刷 講談社
3. 杜詩「清明・二首」

(四)

啄木も杜甫も時代の証言者であった。二人とも時代の強権を恐れず、国家社会の不条理を堂々と指摘した。これは二人の心の奥にひそむ反骨精神がその基調をなしている。啄木が杜甫に傾倒したのはその正義感である。当権者の悪をさばく正義の声は反骨者の口からほとぼしり出る反抗の詩である。その故、啄木も杜甫も社会派詩人として日本・中国の文壇に君臨した。しかもリアルな社会派詩人である。

「北征」は至徳二年（七五七）杜甫が四十六歳の時鳳翔から家族の疎開先である鄜州に赴く際に遭遇した体験や所感をありのままに論述した紀行文学で杜詩の代表作とされている。この長篇詩は君恩に謝する意を述べ、道中で見た戦争の惨澹たる風景を叙し、時政の批評をあますところなく述べて結びとしている。五言百四十句から成る長篇であるのでその一部分のみを抄録してみよう。疎開先の家庭に帰りついた時の状態を

況我墮胡塵 況や我胡塵に墮ち
及歸盡華髮 帰るに及んで尽く華髮なり
經年至茅屋 年を経て茅屋に至れば
妻子衣百結 妻子衣は百結
慟哭松聲迴 慟哭すれば松声廻り
悲泉共幽咽 悲泉共に幽咽す

と再会した時の感動を述べている。一年振りで掬われの身から脱出してわがあばらやに帰り着くと妻や子はひどいつぎはぎだらけの衣を着ていた。あまりにも無惨なあり

さまを見て声をたてて泣いたが松風の騒ぎと小川の流れと一緒にむせび泣くように聞こえてくるという描写で読者の感動の涙を禁じ得ない。このような具象性の強いリアルな表現が杜甫をしてリアリスト詩人ならしめたのである。啄木も

はたらけど

はたらけど猶わが^{くらし}生活楽にならざり

ちっと手を見る

と貧困の慟哭をリアルな表現で三行詩に書いている。社会派詩人である二人は又リアリスト詩人でもあった。

「北征」に家庭の貧困生活を描いた後、杜甫は時局に対する批判を忘れてはいない。

不聞夏殷衰 夏、殷の^{か いん おとろ}衰えしとき

中自誅褒姒 中自ら褒、姒を誅せしを聞かず

周漢獲再興 周、漢の再興するを^え獲しは

宣光果明哲 宣、光^{せん こうはた}果して明哲なればなり

この部分は、昔、夏や殷の朝廷が滅亡の危機に頻していた時に、天子が自ら褒姒^{ほうじ}とか姒己^{だいき}とかの毒婦たちを殺したという話を聞いたことがない。周、漢の朝廷が復興したのは宣王や光武帝が英明賢哲なる天子であったからだと玄宗皇帝が自ら楊貴妃に死を賜わったことを非難している。時政に対する批判をかくもはっきりと言えた詩人は中国文学史上杜甫以外には見当らない。その正面切った反抗精神と骨肉に徹したリアリズムは啄木に絶大な影響を与えたのであろう。啄木の反骨精神とリアルな表現は三行詩以外にも評論を発表して明治の時代を糾弾している。それには「性急な思想」「空中書」「時代閉塞の現状」「食ふべき詩」及び幸徳秋水事件にまつわる文書等に多く見られる。

それでは時代の証言者であった啄木と杜甫について考証を試みてみよう。

前に述べた「北征」は唐の末期の人民が戦禍のために惨憺たる生活を強いられている紀行文学であることはすでに述べた通りであるが、これがリアルな表現で描かれている故、唐朝末期の社会現象であり、それを長詩という文学的方法によって歴史の証言として今日に伝えているのである。

啄木の時代的証言は前述した評論が主で、啄木を思想家の啄木たらしめたゆえんでもあるが三行詩にもそれが見られる。

赤紙の表紙^{てず}手擦れし

国禁^{こくきん}の

書を行李の底にさがす日

の一首にある国禁の書は幸徳秋水らの大逆事件発生後、発売を禁止された赤い表紙の社会主義文献を指して言っているのである。「赤紙の表紙手擦れし」と言う表現は当時国禁の社会主義の書物がひそかに同志の間で読まれ、次から次へと読み継がれている間に赤紙の表紙が手擦れていったことを意味する。明治時代の日本が大逆事件発生後いかに新思想の弾圧を厳しく行ったかがよくわかる。啄木はこの短歌を発表した明治四十三年の秋、朝鮮併合や時代閉塞の現状を悲しみ明治政府に憤りを感じていた。その時に行李の底に隠していた社会主義の本を改めて読み直すほど啄木は明治の時代に絶望を感じていたことがわかる。この一首は明治時代を検証する重要な足がかりとなろう。

珍らしく、今日は、
議会を罵りつつ涙出でたり。
うれしと思ふ。

議会を罵りながら涙が出た。自分にまだ議会を罵るだけの気力がある嬉しさに自信がわいたことを詠んだもので、この議会とは大逆事件、南北正閏論争⁹など重要な議題が持ち出されたが桂太郎内閣によって押し切られた議会の無能を罵ったことがわかる。明治の議会は国民不在の政治をつかさどっている政府に対しては全く無力であり野党も自由に発言を許されなかった時代であった。議会を罵る啄木の反抗精神を煮えたぎらせた時代控訴の歌である。又南北朝正閏論争と関わりのある短歌に「藤沢という代議士を／弟のごとく思ひて、／泣いてやりしかな。」の一首がある。藤沢とは政友会の藤沢元造代議士のことであり、議会の最中に桂内閣の圧迫を受けて行方不明になった事件を指して歌ったのである。独裁政権下における議会も代議士も政治の飾物でしかない明治の政権を諷刺している。

五歳になる子に、何故ともなく、
ソニヤといふ露西亜名をつけて、
呼びてはよろこぶ。

五つになる京子にソニヤというロシア名を付けて満足したという意味であるが、ソニヤというロシアの女性は革命家ソフィア・ペロフスカヤ（一八五三～一八八一）であることが岩城之徳博士の考証によってはっきりしたが、啄木はロシア皇帝アレキサンドル二世の暗殺に成功したソニヤをいとおしく思い娘京子もソニヤのように女性革命家になれたらと願う暴政打倒の念願をこめて詠んだものであろう。暗黒政治は革命で

除去する以外に道はないという時代を反映した短歌である。その証しとして「何か一つ騒ぎを起してみたかりし、／先刻の我を／いとしと思へる。」という歌があることを指摘したい。自分も革命家になってなにか騒動を起してやりたいと思った啄木であった。しかし啄木の病いは次第に彼を無気力に追いつめて行った。

新しき明日の来るを信ずといふ

自分の言葉に

嘘はなけれど――

革命を起す力がないと悟った啄木はひたすらに新しい明日の社会が日本に訪れることを信じた。「嘘はなけれど」と信じたいけれども時代に障壁は厚く容易に打破できるものではないという焦燥がにじみでている。

これら時代を反映する短歌は晩年の作が多く、「悲しき玩具」におさめられている。日清・日露戦争後の啄木の思想の成熟が時代反抗へと傾斜せしめたことがよくわかる。これなど明治の時代検証に必要な文献である。

杜甫が生きた時代は唐玄宗の開元時代と天宝時代とに跨っている。開元時代（七一二～七四一）は盛唐時代とも言われ開明な治政を図り文化が発達した。しかし天宝時代（七四二～七五五）に入ると重税を課し刑罰が濫用された。国民は窮乏の極に達し、官吏が私欲をたくましくし安祿山をはじめとする野心家が反乱を企て戦乱が全国に波及した。杜甫が作詩活動を始めたのは天宝時代のことであるから、窮乏に喘ぐ人民が続出し戦乱の社会現象を見た杜甫は反骨精神が崇ってこれを詩の中に織り込まなければ気がすまない状態にあった。その中で「兵車行」は戦乱のありさまを赤裸裸に詩に詠んでいる。玄宗は年号を天宝と改め楊貴妃の美色に溺れて、政治への情熱が薄らいで行った。吐蕃征代のため壯丁を兵役に召集し農村生活は極度に疲弊した。農民は玄宗を恨み国家に政治的危機が訪れた。仕官を切に望みながら失敗を余儀なくされていた杜甫が、このような社会現象を見て黙っておれなかったのは当然のことである。反骨精神が爆発して明らかに政府の軍事政策を非難したのが「兵車行」である。

車麟麟	馬蕭蕭	車麟麟	馬蕭蕭
行人弓箭各在腰		行人の弓箭各々腰に在り	
耶孃妻子走相送		耶孃妻子走って相送り	
塵埃不見咸陽橋		塵埃見えず咸陽橋	
牽衣頓足攔道哭		衣を牽き足を頓めて道を攔って哭す	
哭声直上干雲霄		哭声直上して雲霄を干す	

杜甫は長安郊外咸陽橋のほとりで、辺境の戦場へ駆り立てられて行く出征兵士の群を見たのである。親や妻子が隊伍を見送り慟哭が断えなかった。泣が声が空までとどきそうであった。杜甫が兵士に派遣先を尋ねると自分は十五の年に徴兵されて北方の守備につき、四十になった今もまた西方の辺境へ連れて行かれる。

邊庭流血成海水　　辺庭の流血海水を成すも
武皇開邊竟未已　　武皇辺を開くの意未だ已まず
君不聞漢家山東二百州　　君聞かずや漢家山東の二百州
千邨萬落生荊杞　　千邨萬落荊杞を生ずるを

働き手のない農村は疲弊し切って戦場では流血が海をなしている。天子の領土拡張の野望はいまだに消えないが田畑には荊や杞が生い茂ったままである。女たちの仕事では収穫など望めないが、それでも役人がやって来て税を求める。租税いずこより出ださん。

君不見青海頭　　君見ずや青海の頭
古來白骨無人收　　古來白骨人の収むる無し
新鬼煩冤舊鬼哭　　新鬼は煩冤し旧鬼は哭す
天陰雨濕聲啾啾　　天陰り雨濕うとき声啾啾

新しい戦死者は怨み、古い戦死者は慟哭して雨の降る日など、うめく泣き声がどこからともなく聞こえてくる。

杜甫が玄宗の侵略戦争に対して浴びせかけた批判と諷刺であり政府攻撃である。社会派詩人として民衆の側に立ち、ヒューマニスト杜甫の輪郭が浮かび上がってくるのではないか。啄木の日清・日露戦争に対する批判と轍を一にしている。「兵車行」と同じく反戦の詩として「前出塞」第六首に

殺人亦有限　　人を殺すも亦有限り
立國自有疆　　国を立つるも自ら疆有り
苟能制侵陵　　苟も能く侵陵を制せば
豈在多殺傷　　豈に多く殺傷するに在らんや

とある。外族の侵略に対する戦争は止むを得ないが、立国の境を超えてまで戦争をするのは無益の殺傷をくり返すのみであるとの杜甫の信念であった。正義的詩人、人道的詩人と評せられた杜甫の姿がこういう詩篇によってよく理解し得るものと思われる。

正義も人道も杜甫の反骨精神より出でたものであり、玄宗に対して忠君愛国の情をたぎらせたけれども、社会現象や人民の困しさを偽りなく詩篇に織り込んだ時代の忠

節であった。啄木は杜甫の時代証言者としての反骨に共鳴を感じ、詩聖としてあがめたのである。

註

1. 岩城之徳編「石川啄木必携」 149頁 学燈社

(五)

以上啄木と杜甫について比較文学の立場から四章所論を述べてきたが結論を急ぐことにしよう。

啄木が杜甫を中国の詩聖として仰ぎ、李白より杜甫の詩がすぐれているとしたのは杜甫のヒューマニストとしての反骨精神とリアリスト詩人の偉大さにあったからだ。啄木は生まれながらにして具有していた自負心と盛岡中学時代の盛中ルネッサンス教育を受けて彼独特の反骨精神を育くみ、盛岡中学中退後文学家を志して北海に漂泊の生活を余儀なくされた時、杜甫の漂泊に共鳴して反骨的な社会派詩人の影響を受けそれに傾倒して行った。啄木も杜甫も日本と中国文学史上漂泊の詩人としてその名を知られ、二人とも社会現象をリアルに捕え文学作品にした。啄木は明治エリートとしての資格を失い文学で志を立てようと企てたが生活のために漂泊を強いられ、杜甫は仕官が目的で漂泊を続けた。二人には共通したヒューマニズムの血が通い、啄木は創作活動に失敗して回想歌として漂泊の詩篇「一握の砂」と評論を世に残したが、杜甫は漂泊を続けながら詩作活動に没頭し、漂泊中に見聞した社会現象をリアルに詩に詠んだ。啄木は唐詩選を読んでいる内に杜詩の精神に共鳴して時政を批判し、歴史の検証を文学的方法によって重要な文献を残した。啄木は日本の明治の時代検証者であり、杜甫は中国の唐末の時代検証者であったという相似性が挙げられる。啄木没後彼の社会批判の詩歌によって日本のプロレタリア文学が抬頭し、杜甫死後七言律詩が定着して中国の新しい詩体をなした。日本及び中国の文学史上に於ける二人の貢献は絶大である。

最後に私個人の事でおこがましいが啄木短歌を七、四、三の新詩体で中国語譯して一九八九年岩手日報啄木文学賞を受賞した（「漂泊詩人石川啄木的世界」豪峰出版社）。これは杜詩の七言律詩を応用したものである。七、七を啄木三行詩にちなんで七、四、三の新漢詩体にした。これによって第三行目の三に啄木短歌によく見られる人生の嘆きや悲しみが巧みに表現できたことを喜びとしたい。啄木短歌の中国語訳も啄木と杜甫の合体であることを強調して結びとしたい。

airiti

参考文献

吉川幸次郎著「杜甫ⅠⅡ」 筑摩書房

福原龍蔵著「杜甫」 講談社

簡明勇著「杜甫七律研究與箋註」 五州出版社

田川繁著「杜甫」 創樹社

岩城之徳著「石川啄木」 桜楓社

岩城之徳著「石川啄木必携」 学燈社

和田利男著「杜甫」 めるくまーる社